私の中のルネサンス

古代の技法から西洋絵画の系譜を辿る

談 赤木範陸（洋画家）

【あかぎ・のりみち】
1961年大分県生まれ。90年東京藝術大学大学院修了。同年よりDAAD（ドイツ学術交流会）により渡独。95年国立ミュンヘン美術アカデミー卒業、ディプロム取得、マイスター及びマイスターシューラーの称号授与。2011年アートフェア東京、個展。その他、国内外美術館、画廊における個展多数。現在横浜国立大学大学院教授。

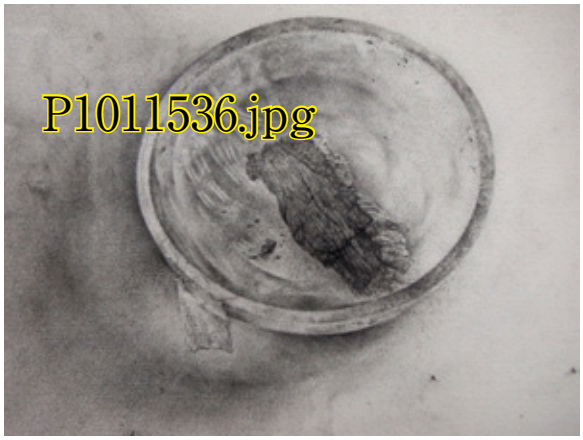
●展覧会インフォメーション
4月10日（水）～4月15日（月）　個展　広島天満屋広島八丁堀7階美術画廊

「アレンビックと硝子器の静物」3号　エンカウスティーク

――先生の使う技法「エンカウスティーク」は古代ローマ、エジプトのファイユームの肖像画に使われていたものですね。

赤木　蜜蠟に顔料を混ぜ、熱で溶かしながら板や麻布に描いていく方法です。私の場合は絵具を使わずに、蠟を麻布に染み込ませて、その濃淡で絵を作っていきます。蠟というのは、化学変化が殆ど起こらないんですよ。だからファイユームの肖像画も現代まで鮮やかな色彩で残っている。そのリアルな描写は卓越したものがあります。その蠟で描く系譜は、ルネサンス初期の混合技法に継承され、油彩へと変わるまでずっと西洋絵画の文脈を作ってきました。

――ドイツの大学でエンカウスティークの研究もされましたか。



「硝子の器と木片」素描　鉛筆、紙

赤木　しました。あちらでは研究が進んでいましたから文献もそれなりにありました。ドイツではあわせて15年程過ごし、大学では教会芸術を研究する教授の下で6年間勉強していました。それ以前も日本でキリスト教美術をよく見ていたので、初期の作品はその要素を直接的に取り入れているものが多いです。金地の背景にしたり、祭壇画の様式をとってみたり。留学当時、ヨーロッパでは抽象画が全盛期で、「何でそんな絵を描くんだ」なんて言われたりもしました。

――ドイツルネサンスの絵画に影響を受けられたりもしましたか。

赤木　はい。ドイツはイタリアと比べて、人の気質なども細部にこだわってこつこつやるタイプという気がします。イタリアは割と大まかで全体を見るけど、何事もお洒落な感じ。ルネサンス絵画でもそれは感じられます。最初に油絵具が使われ始めたフランドルの代表的画家であるファン・アイクの作品は、即物的な写実描写が強いです。遠近法などは良く見ると正確ではないけれども、1つ1つの対象の細部をものすごい観察力で追求している。ドイツの表現はそれに近いんですね。対してイタリアは、完璧な遠近法を用いて、全体の空間やバランスを意識している。ドイツの気質が私の具象表現に合っていたのかもしれません。

――初期はテンペラや混合技法で制作していたそうですね。今の技法に転換したのはなぜですか。

赤木　エンカウスティークに注目したのは、大学で古典技法をやっていて、油絵より前の技法は何だろうと思ったのがきっかけです。中世からルネサンスまではテンペラ、テンペラと油彩の混合技法、フレスコなどですがその前となると急に資料が無くなります。調べてわかったのは、蠟テンペラを使っていたということでした。中世以降のテンペラというと、卵黄を混ぜたテンペラが普通ですが、その前は蠟を使っていたんですね。その基となったのがエンカウスティークで、古代ローマから、当時ローマが支配していたエジプトへと伝わったと言われています。蠟で描く技術は、ローマが分裂した後の東ローマ帝国でひっそりと生き続け、それが蠟テンペラ、卵テンペラへと発展して、西ローマにも再度伝わります。そしてルネサンスへと移行していくわけです。

ドイツ留学当時、ヨーロッパを席巻していた抽象表現では、形態の省略が重視されていました。ただ抽象は私には合わなかったので、自分なりのオリジナリティを与えるために、表現は具象ですが、行程上の省略をしました。省略する行為が良しとされている中、具象でやっていくのにエンカウスティークは最適だったんです。本来のエンカウスティークの技法を応用して、地塗りもせず絵具も使わず、蠟のしみの濃淡だけで絵が出来上がる。省略して具象を描く、ということができた。そういった省略の仕方は新しかったので、ヨーロッパでは面白がられました。また、日本画にも省略化、簡略化の伝統があるので、日本人の感性にも通ずる技法だと思っています。